

平成 25 年 9 月 16 日

第 13 回懇話会の報告

企画委員会

1. 開催日時 平成 25 年 9 月 11 日 (水) 18 時 30 分 ~ 20 時 10 分
2. 場所 専修大学神田キャンパス 神田校舎 7 号館 764 教室
3. 講演者 古澤昌宏氏 (SAP ジャパン バリュースタッフ)
4. 出席者 8 名
5. テーマ SAP の企業戦略と製品の方向性について
~ R/3 はもうありません、SAP Business Suite の売上ですら全体の半分以下。SAP が今、そして今後力を入れていくのは何か？
6. 発表概要
 - (1) 略歴 1989 年 野村総合研究所入社 (証券、公共システムの開発を担当)
1995 年 SAP ジャパン入社
(調達管理コンサルタントなどを経験後、現在は顧客の投資判断支援などの Value Engineer として支援)
 - (2) ERP の SAP は過去の姿となりつつあり、Analytics や Mobile、Cloud、Database などの製品群を買収により取り込み、マーケットの拡大に注力している。
 - (3) スタンフォード大と開発した In-memory Database は、従来の ERP のパフォーマンス上のネックとなっていた“実行系の ERP ソフトと分析系ソフトとの間でのリアルタイムなデータ共有”を可能とする製品で、ERP の目指すデータの一元管理の姿がより現実的なものとなってきた。
 - (4) B2B の企業マーケットだけから、B2B2C で個人マーケットを狙った市場への拡大を目指しており、2015 年までに売り上げの 10% を B2B2C で上げることを目指している。その結果、SAP ユーザー数を 10 億人に拡大する計画である。
 - (5) 技術変化の激しい IT では“10 年後のマンマシンインターフェイスは予想できない”と考えているが、SAP は ABAP アーキテクチャーの採用によってビジネスロジック (アプリケーション) や DB と、マンマシンインターフェイスとを独立させており、その結果 HTML 化や Mobile 化などにも対応しやすくなっていた (Timeless Software を実現するための先見の明があった)。
 - (6) Timeless Software の 8 つの原則
コンテンツとコンテナを切り離す
テクノロジー層間の関連を分離する
コンポーネント化
デザイン (仕様策定) 環境は 1 か所に
提供側の柔軟性は高く、かつ用途から独立させる
最適化と目的は別
抽象化層間の最適化
デザイン思考
これらの原則に沿うことで、ビジネスの変化に対応し、破壊的イノベーションをせずに長年に渡って現役ソフトでありえた。
 - (7) マシンマシン (システム間) インターフェイスは苦しみ (データの古さ、マスター管理の非一元化、インターフェイス保守の負荷) を生み出す元凶であり、これをなくす方向で SAP は In-memory Database の開発によって、トランザクションデータを分析系でリアルタイムに見られることを目指している。
 - (8) 人と人とのつながりは、ビジネスを生み出す源泉。働く人には、ビジネスを作り出す人 (分析やコミュニケーションツールのユーザ) とそれを忠実にデリバリーする人 (トランザクションシステムのユーザ) の 2 種類がいる。

(9)日本と欧米に働く意識の差がある。欧米は「面倒はいやだ。徹底的に手を抜く」ことを考え、伝票入力 of 二重化を避けて、情報の再利用を考える。日本は「嫌な仕事でも、いかに効率よく行うか」を考え、それがパッケージのカスタマイズの増加につながる。

7. 質疑概要

・なぜドイツでは ERP が出来たのに、日本ではできなかったのか？

SAP では開発者、特に技術のベースを構築する開発者が、社内でもっとも高く処遇されている（ベンツクラスの自動車が発与される）ことも一因ではないか。また社員教育も徹底して実施されている。

8. 感想

・業務処理におけるシステムの利用範囲があまりに拡大した今日では、ERP などパッケージなしでの企業システム構築は非現実的である。その中で、我が国の企業は本当に ERP をうまく使いこなしているのだろうか？重要な研究のテーマではないかと考える。

以上
(記録 甲斐莊正晃)